

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ いしゆよ、 イウデヤのひとはかを  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじて、 へいそつなんぢのいさぎよきみを  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 まもるとき、 なんぢはみっかめにふくかつ  
 守 時 爾 三日目 復 活  
 して、 せかいにいのちをたまえり。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆえ にてんぐんはなんぢいのちをほどこすの  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 しゆによべり、 ハリストスよ、 こうえいは  
 主 呼 光 榮  
 なんぢのふくかつにきし、 こうえいはなんぢ  
 爾 復 活 歸 光 榮 爾  
 のくににきす、 ひとりひとをいつくしむ  
 國 歸 獨 人 慈  
 しゆよ、 こうえいはなんぢのおもんばかりに  
 主 光 榮 爾 慮  
 きす。  
 歸

【 迎接祭のトロパリ 第1調 】

おんちょうをみちこうむる しょうしんどうていぢょ  
 恩 寵 満 被 生 神 童 貞 女

よ、よろこべ、なんぢよりぎのひハリストわれ  
 慶 爾 義 日 我  
 らのかみ、くらやみにあるものを  
 等 神 幽 暗 在 者  
 てらすしゅはかがやきいでたればなり。  
 照 主 輝 出  
 ぎなるおきなよ、なんぢもたのしめ、  
 義 翁 爾 樂  
 なんぢわがたましいのきゅうしゅ、われらにふく  
 爾 我 靈 救 主 我 等 復  
 かつをたもうものをいだきたればなり。  
 活 賜 者 抱

【 日本の亞使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠  
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖  
 なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい  
 神 撰 笛 愛  
 にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光  
 しよ うしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
 照 者 亞 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全 世 界 爲 生 命 賜 せ 聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三 者 祈 給 え。

【 三歌齋經のコンダク 第3調 】

われむちにしてちちたるなんぢのこうえいと  
我 無 知 父 爾 光 榮 遠

おざかり、なんぢがわれにたくせしとみを  
爾 我 託 富

あくのうちについやせり。ゆえにとうし児  
悪 中 費 故 蕩 兒

のこえをなんぢにささぐ、こうおんなる  
聲 爾 捧 洪 恩

ちちよ、われなんぢのまえにつみをえた  
父 我 爾 前 罪 獲

り、つかいするわれをいれて、なんぢが  
痛 悔 我 納 爾

やといびとのひとりのごとくなした給  
傭 人 一 如 爲 給

まえ。

【 日本の亞使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き  
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸  
 す、  
 せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ、 わ が  
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我  
 く に な ん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受  
 し に、 な ん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 初 我 國 於 己  
 れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も、 ハ ス ト ス の  
 外 來 者 知  
 ひ か り と あ た た か き を な が し、 な ん ぢ の て  
 光 暖 流 爾 敵  
 き を ぞ く し ん の こ と な し、 か れ ら に か  
 屬 神 子 爲 彼 等 神  
 み の お ん ち ょ う を あ た え、 ハ ス ト ス の き ょ う か い を た て  
 恩 寵 與 教 會 建  
 た り、 い ま こ の き ょ う か い の た め に い の り  
 今 此 教 會 爲 祈  
 た ま え、 け だ し わ れ ら そ の し ょ し は な ん  
 給 え 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 迎接祭のコンダク 第1調 】

いまもいつもよよに、アミン  
 今 何 時 世 世  
 ハストスカみよ、なんぢはおのれのこうたん  
 神 爾 己 降 誕  
 にてどうていぢよのはらをせいにし、よ  
 童 貞 女 腹 聖 宜  
 ろしきにかないてシメオンのてにふくをく  
 合 手 福 降  
 だし、いまわれらのためにすくいをそな  
 今 我 等 爲 救 備  
 えたまえりひとりひとをいつくしむ  
 給 獨 人 愛  
 しゅよわがくにをつねにへいわにし、  
 主 我 國 恒 平 和  
 なんぢのあいするきょうかいかためたまえ。  
 爾 愛 教 會 固 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もるもろ たまもの もつ これ かざ  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生

しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ  
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖 神 聖 勇 毅 聖  
じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
常 生 者 我 等 憐  
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖 神 聖 勇 毅 聖  
なるじょうせいのものよ、われらをあわれめ  
常 生 者 我 等 憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
 歸 今 何 時 世 世  
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇  
 き ぎ 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等 憐  
 あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

**【 プロキメン 提綱 主日 第1調 生神女の歌 第3調 】**

司祭) つつし き しゅうじん へいあん  
 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん  
 爾の神にも、

司祭) えいち  
 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、われらなんぢをたのむがごとく、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら なん ぢ を た の む が ご と く 、  
 主 我 等 爾 を 頼 り 如

な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え 。

誦經) <sup>ぎじん</sup> 義人よ、<sup>しゅ</sup> 主の爲に <sup>よろこ</sup> 喜 べ、<sup>さんえい</sup> 讚 榮するは <sup>ぎしゃ</sup> 義者に <sup>かな</sup> 適う、

しゅ よ 、 わ れ ら な ん ぢ を た の む が ご と く 、  
 主 我 等 爾 頼 如  
 な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え 。

誦經) <sup>わ</sup> 我が <sup>たましい</sup> 靈 は <sup>しゅ</sup> 主を <sup>あが</sup> 崇め、<sup>わ</sup> 我が <sup>しん</sup> 神は <sup>かみわ</sup> 神我が <sup>きゆうしゅ</sup> 救 主を <sup>よろこ</sup> 悦 べり。

わ が た ま し い は しゅ を あ が め 、 わ が  
 我 靈 主 崇 我  
 し ん は わ が か み きゆうしゅ を よろこ べ  
 神 我 神 救 主 悦  
 り 。

【 <sup>アポストロス</sup> 使 徒 經 135 端 コリント前書 6 章 12～20 節  
 335 端 エウレイ書 13 章 17 節～21 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが <sup>じん</sup> コリント人に <sup>たつ</sup> 達する <sup>ぜんしょ</sup> 前書の <sup>よみ</sup> 讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 みて <sup>き</sup> 聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>およそ</sup> 凡の物 <sup>ものわれ</sup> 我に <sup>ゆる</sup> 許されたり、<sup>しか</sup> 然れども <sup>およそ</sup> 凡の物 <sup>ものえき</sup> 益あるには <sup>あら</sup> 非ず、<sup>およそ</sup> 凡の物 <sup>ものわれ</sup> 我

<sup>ゆる</sup> <sup>しか</sup> <sup>そのいつ</sup> <sup>われ</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>しょく</sup> <sup>はら</sup> <sup>ため</sup> <sup>はら</sup> <sup>しょく</sup> <sup>ため</sup>  
 に許されたり、然れども其 一も我に主たるべからず。食は腹の爲、腹は食の爲なり、  
<sup>しか</sup> <sup>これ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>かみ</sup> <sup>これ</sup> <sup>はい</sup> <sup>み</sup> <sup>いんこう</sup> <sup>ため</sup> <sup>あら</sup> <sup>すなわち</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>ため</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>また</sup> <sup>み</sup>  
 然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身  
<sup>ため</sup> <sup>かみ</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>ふくかつ</sup> <sup>そのちから</sup> <sup>もつ</sup> <sup>われら</sup> <sup>ふくかつ</sup> <sup>あにし</sup>  
 の爲なり。神は主を復活せしめたり、其能を以て我等をも復活せしめん。豈知らず  
<sup>なんぢら</sup> <sup>み</sup> <sup>えだ</sup> <sup>ゆえ</sup> <sup>われ</sup> <sup>えだ</sup> <sup>と</sup> <sup>いんぶ</sup> <sup>えだ</sup> <sup>な</sup>  
 や、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて、淫婦の肢と爲さ  
<sup>しか</sup> <sup>あるい</sup> <sup>し</sup> <sup>いんぶ</sup> <sup>つ</sup> <sup>もの</sup> <sup>こ</sup> <sup>いつたい</sup> <sup>な</sup> <sup>けだしい</sup>  
 んか、然すべからず。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、蓋云えるあ  
<sup>ふたつ</sup> <sup>もの</sup> <sup>いつたい</sup> <sup>な</sup> <sup>しか</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>つ</sup> <sup>もの</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>いつしん</sup> <sup>な</sup> <sup>いんこう</sup> <sup>さ</sup>  
 り、二の者は一体と爲らんと。然れども主に附く者は主と一神と爲るなり。淫行を避  
<sup>およ</sup> <sup>ひと</sup> <sup>おこな</sup> <sup>つみ</sup> <sup>み</sup> <sup>そと</sup> <sup>あ</sup> <sup>しか</sup> <sup>いん</sup> <sup>おこな</sup> <sup>もの</sup> <sup>おのれ</sup> <sup>み</sup> <sup>おか</sup>  
 けよ、凡そ人の行う罪は身の外に在り、然れども淫を行ふ者は己の身を犯すな  
<sup>あにし</sup> <sup>ず</sup> <sup>や</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>み</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>うち</sup> <sup>お</sup> <sup>せいしん</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>かみ</sup> <sup>う</sup> <sup>もの</sup> <sup>でん</sup>  
 り。豈知らずや、爾等の身は爾等の表に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にし  
<sup>なんぢら</sup> <sup>おのれ</sup> <sup>ぞく</sup> <sup>あら</sup> <sup>けだし</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>あた</sup> <sup>い</sup> <sup>もつ</sup> <sup>か</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>ひと</sup> <sup>かみ</sup>  
 て、爾等己に屬するに非ざるを。蓋爾等は價を以て買われたり、故に均しく神に  
<sup>ぞく</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>み</sup> <sup>もつ</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>たましい</sup> <sup>もつ</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>かみ</sup> <sup>き</sup>  
 屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益  
 になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配され  
 ることはない。食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。  
 からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。そして、神は主をよみが  
 えらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。あなたがたは自分のからだ  
 がキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体として  
 よいのか。断じていけない。それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないの  
 か。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。しかし主につく者は、主と一つの靈にな  
 るのである。不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者  
 は、自分のからだに対して罪を犯すのである。あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受  
 けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。  
 あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあら  
 わしなさい。

\*\*\*\*\*

<sup>けいてい</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>きょうどうし</sup> <sup>したが</sup> <sup>これ</sup> <sup>ふく</sup> <sup>けだし</sup> <sup>かれら</sup> <sup>かみ</sup> <sup>まえ</sup> <sup>こたえ</sup> <sup>な</sup>  
**誦經)** 兄弟よ、爾等の教導師に順いて、之に服せよ、蓋彼等は神の前に答を爲す  
<sup>もの</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>たましい</sup> <sup>ため</sup> <sup>けいせい</sup> <sup>かれら</sup> <sup>よろこ</sup> <sup>これ</sup> <sup>おこな</sup> <sup>たんそく</sup>  
 べき者として、爾等の靈の爲に徹醒す、彼等をして悦びて之を行わしめよ、歎息  
<sup>おこな</sup> <sup>なか</sup> <sup>こ</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>えき</sup> <sup>ゆえ</sup> <sup>われら</sup> <sup>ため</sup> <sup>きとう</sup> <sup>けだし</sup> <sup>われら</sup> <sup>よ</sup>  
 して行わしむる勿れ、此れ爾等に益なきが故なり。我等の爲に祈禱せよ、蓋我等は善  
<sup>りょうしん</sup> <sup>たも</sup> <sup>しん</sup> <sup>いっさい</sup> <sup>こと</sup> <sup>おい</sup> <sup>よ</sup> <sup>おこな</sup> <sup>のぞ</sup> <sup>わ</sup> <sup>こと</sup> <sup>き</sup>  
 き良心を有てるを信ず、一切の事に於て善きを行わんことを望めばなり。我が殊に祈  
<sup>とう</sup> <sup>な</sup> <sup>もと</sup> <sup>すみやか</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>かえ</sup> <sup>ため</sup> <sup>ねが</sup> <sup>へいあん</sup> <sup>かみ</sup> <sup>えいえん</sup> <sup>やく</sup>  
 禱を爲すを求むるは、速に爾等に還されん爲なり。願わくは平安の神、永遠の約

ち よ ひつじ おおい ぼくしゃ われら しゅ し おこ もの  
 の血に由りて 羊 の 大 なる 牧 者 たる 我等の主 イスス ハリストスを死より起しし者は、  
 そのよこ ところ なんぢら うち な そのむね おこな ため なんぢら およそ ぜんじ まつと  
 其 悦 ぶ 所 を 爾 等 の 中 に 爲 して、 其 旨 を 行 わ ぬ 爲 に、 爾 等 を 凡 の 善 事 に 全 う  
 せんことを、 イスス ハリストスに由りてなり。 願わくは 光 榮 は 彼 に 無 窮 の 世 に 歸 せん、  
 アミン。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あなたがたの指導者たちの言うことを聞きいれて、従いなさい。彼らは、神に言いひらきをすべき者として、あなたがたのたましいのために、目をさましています。彼らが嘆かないで、喜んでこのことをするようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならない。わたしたちのために、祈ってほしい。わたしたちは明らかな良心を持っていると信じており、何事についても、正しく行動しようと願っている。わたしがあなたがたの所に早く帰れるため、祈ってくれるように、特別にお願いする。永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引き上げられた平和の神が、イエス・キリストによって、みこころにかなうことをわたしたちにして下さり、あなたがたが御旨を行うために、すべての良きものを備えて下さるようにこい願う。栄光が、世々限りなく神にあるように、アアメン。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日 第1調 及び迎接祭 第8調 】

司祭) なんぢ へいあん  
 爾 に 平 安、

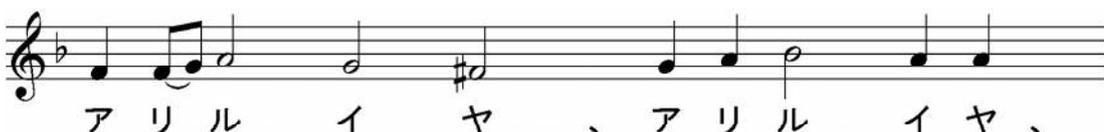
誦經) なんぢ しん  
 爾 の 神 に も、

司祭) えいち  
 睿 智、

誦經) ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう  
 アリルイヤ、願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



誦經) おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ  
 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世々に  
 た もの われなんぢ な うた  
 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、





誦經) <sup>しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ</sup> 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ</sup> を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 79 端 15 章 11~32 節

マトフェイ福音書 11 端 5 章 14~19 節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き しゅ さ たとえ もう い あるひと ふたり こ そのじしちち い</sup> 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或人に二の子あり、其次子父に謂え

ちち わ う さんぎょう ぶん われ あた ちちそのさんぎょう かれら わか いくひ へ  
 り、父よ、我が得べき産業の分を我に與えよ、父其産業を彼等に分てり。幾日も經  
 ざるに、次子は其得たる者を 盡く集めて、遠き地に旅行し、彼処に放蕩に生活して、  
 そのさんぎょう むだづかい ことごと ついや およ そのち おおい ききんおこ かれはじ  
 其産業を浪費せり。盡く耗ししに及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始め  
 とぼ おぼ すなはちゆ そのち ちゅうみん ひとり み よ そのひとかれ た  
 て乏しきを覺えたり。乃 往きて、其地の住民の 一に身を寄せたれば、其人彼を田に  
 つかわ ぶた か かれ ぶた くら まめがら もつ そのほら み ほつ  
 遣して豕を牧わしめたり。彼は豕の食う豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、  
 かれ あた もの つい みづか かえり い わ ちち いくばく やといびと かに  
 彼に與うる者なかりき。遂に自ら省みて曰えり、我が父には幾何かの傭人の糧に  
 あま われ う ほろ た わ ちち ゆ これ い ちち われてんおよ  
 餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天及び  
 なんぢ まえ つみ え すで なんぢ こ とな た われ なんぢ やといびと ひとり  
 爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず、我を爾が傭人の 一の  
 ごと な すなはちた そのちち ゆ なおとお あ とき そのちちかれ み あわれ ほし  
 如く爲せと。乃 起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て 憫み、趨り  
 すす そのくび いた かれ せつぶん こ これ い ちち われてんおよ なんぢ まえ  
 前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天及び爾の前に  
 つみ え すで なんぢ こ とな た しか ちち そのしょぼく い もつと  
 罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は其諸僕に謂えり、最も  
 うるわ こるも いた かれ き ゆびわ そくて くつ そのあし ほどこ かつこ こうし  
 美しき衣を出して、彼に衣せよ、指環を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる 犢  
 ひ これ ほふ われらくら たの けだしこ わ こし またい うしな またえ  
 を牽きて、之を宰れ、我等食い楽しまん。蓋此の我が子は死して復生き、失われて又得  
 ここ おい かれらたの たまたまそのちょうした あ かえ いえ ちか とき  
 られたり。是に於て彼等楽しめり。適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、  
 がく まい き ひとり ぼく よ こ なにごと と かれい なんぢ おとうと  
 樂と舞とを聞きたれば、一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問いしに、彼曰えり、爾の弟  
 きた なんぢ ちち そのつつが かれ え よ こ こうし ほふ  
 來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥えたる 犢を宰りたり。  
 ちょうしいか い ほつ そのちちい かれ すす かれちち こた い み  
 長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勧めしに、彼父に答えて曰えり、視  
 われたねんなんぢ つか いま かつ なんぢ めい たが なんぢいま かつ こやぎ われ  
 よ、我多年爾に事えて、未だ嘗て爾の命に違わざれども、爾未だ嘗て小山羊を我  
 あた われ とも とも たの しか こ なんぢ こ あそびめ とも なんぢ さん  
 に與えて、我を友と共に楽しましめざりき。然るに此の爾の子、妓と共に爾の産  
 ぎょう ついや もの きた とき なんぢかれ ため こ こうし ほふ ちちかれ い こ  
 業を耗しし者の來りし時は、爾彼の爲に肥えたる 犢を宰れり。父彼に謂えり、子  
 なんぢ つね われ とも あ われ ぞく もの みななんぢ ぞく ただこ なんぢ おとうと し  
 よ、爾は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。惟此の爾の弟は死し  
 またい うしな またえ ゆえ われらよろこ たの  
 て復生き、失われて、又得られたるが故に、我等喜び楽しむべきなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 主は譬をお話しになった。「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父

親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあつたので、彼は食べることに窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやっけて豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとして居る。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思つて走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまつた。ところが、兄は畑にいたが、帰つてきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答へた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなされたのです』。兄はおこつて家にはいろいろとしなかつたので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかつて言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかつたのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下されたことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にゐて、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰つてくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にゐるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』。

\*\*\*\*\*

司祭) しゅ そのもんと い なんぢら よ ひかり やま うえ た まち かく あた ひと  
 主は其門徒に謂えり、爾等は世の光なり、山の上に建てる邑は隠る能わず。人

ともしび とも これ ます した お すなわちとうだい うえ お しか およ いえ あ もの  
 燈を燃して、之を斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば凡そ家に在る者に

て か ごと なんぢら ひかり ひとびと まえ て かれら なんぢら よ おこない み てん  
 照る。是くの如く爾等の光は人人の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て、天

いま なんぢら ちち さんえい ため われりつぼうあるい よげんしゃ こぼ ため きた おも  
 に在す爾等の父を讚榮せん爲なり。我律法或は預言者を毀たん爲に來れりと意う

なか わ きた これ こぼ あら すなわちこれ な けだしわれまこと なんぢら つ  
 勿れ、我が來れるは之を毀つに非ず、乃之を成さん爲なり。蓋我誠に爾等に語ぐ、

てんち はい いた りつぼう いてんいつかく はい ことごと な ゆえ こ い  
 天地の廢するに至るまでは、律法の一畫も廢せずして、盡く成らん。故に此の至と

ちいさ いましめ ひとつ こぼ かつか ごとひと おし もの てんごく おい い ちいさ もの とな  
 小き誠の一を毀ち、且是くの如く人に教えん者は、天國に於て至と小き者と稱

ただこれ おこな かつおし もの てんごく おい おおい もの とな  
 えられん、唯之を行ひ、且教えん者は、天國に於て大なる者と稱えられん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柀の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照

させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。わたしが律法や預言者を廃するためきた、と思っはならない。廃するためではなく、成就するためきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※ 聖体礼儀③（金ロイオン）へ